

2009年12月
第3回国際シンポジウム

甲山治
東南アジア研究所 准教授

セッション3：社会変化の駆動力としての水資源

第3セッションは、水資源が、人間社会およびその変化に及ぼす影響に関して、4名の発表が行われ、各々の研究対象地域における水資源と人間圏の関係性に関して考察がなされた。最初の発表者は中国近代史家のケネス・ポメラント氏（UCLAアーバイン）で、中国とインドにおける水資源のアンバランスな分布に関して解説した。計画中および現在ヒマラヤで実施されている巨大プロジェクトの背景にある複合的な影響力に注目し、この状況でもっとも重要な役割を果たしている中国への懸念を述べた。二番目の発表者は水文学者の鼎信次郎氏（東京工業大学）で、最新の水文モデルを用いて地球規模の水資源の持続性についての議論を行った。世界の水資源の取水量と賦存量の割合を計算することで、水資源の充足具合を評価した。持続可能性評価の基準は未だ不十分であり、人間にとって最低限必要な水の量に関する議論などといった、倫理的な側面を考慮する必要があると結論付けた。三番目の発表者は中央アジア政治学者の稲垣文昭氏（慶應大学）で、1960年代以降の中央アジアの水配分体制の変遷に注目した。経路依存性の観点から中央アジアの水管理政策の解析を行い、水紛争のメカニズムを示した。そして最後に東南アジア史家のジェイムス・ウォレン氏（マードック大）が、食糧不足と飢饉の原因と結果に関して、気候的な要因・エルニーニョ、干ばつと疫病、食糧不足、地域的な特徴、社会的な構造といった側面から説明を行った。なかでも、食糧不足と農村社会、気象要因の構造的な関連に注目した発表を行った。